

沈黙の条件

名古屋で七月下旬、東西宗教交流学

会（会長・河波昌東洋大学名誉教授）

の第二十三回學術大会が開かれた。仏

教とキリスト教を中心に宗教哲学を語

る学会で、私も八年ほど前から出席し

ている。今年は、長らく会長を務めて

いた上田閑照・京都大学名誉教授の哲

学について集中的に話し合った。上田

さんがこれまでの思想遍歴を振り返

り、南山大学宗教文化研究所のヤン・

ヴァン・ブラフト元所長らが批評と質

問をして三日間を過ごした。

上田さんは初日、キリスト教の神秘

思想家エックハルトと禅仏教について

語った。詳しくは岩波書店版『上田閑

照集』第八巻にある論文「神秘主義か

南	善
無	財

菅原伸郎

ら非神秘主義へ」などをお読みいた
きたいが、「無」や「非有」を説明す
るなかでこんな発言をした。

「こうした言葉が出ると、各宗教はと
かくそれぞれの立場で理解してしま
う。普遍性があると思って『神は一つ
です』などと呼びかけてみても、その
発想自身が一つの立場になっていろ
とに気が付かない。となると、宗教間
の対話はどこまで成り立つのか。結局
は『沈黙』がともに可能なことなのか

もしませんね」

宗教家や宗教学者の集まりを取材し
てきて言葉による対話の限界を見てき
た私は、まさにその通りだ、と思っ
た。そうなのだ、宗教の奥深い世界を
理屈で理解し合うことは絶望的なほど
に難しい。しかし、あの「沈黙」を始
めに置くならば、他宗教の人たちとは
もちろん、宗教を持たない人とさえ
も同じ感性を共有できるかもしれな
い。そう考えて、最終日の討論では、
横浜市にある栄光学園（カトリック
系）が全学級で行っている「瞑黙」な
どを例に挙げて、「公立の学校で合掌な
どをすれば、唯物論の人からは批判さ
れるだろう。でも、言葉でも祈りでも
ない『黙想』ならば道があるかもしれ
ませんね」と発言してみた。大いに賛
同してくださった方もいたのだが、上

田さんはうなづきながらも「ただし、その沈黙の背景には批判的な討議が欠かせませんけどね」と念を押された。

学会が終わったあとで、この言葉を改めて考えてみた。たしかに、ただ沈黙があればいいのではない。無前提に沈黙に浸れば、そこに安住したり、怪しい世界に迷い込んだりすることも出てくる。沈黙が静かな自省を超えて畏怖や狂気に結びつくこともありえよう。「維摩経」には在俗の維摩居士が「不二」を沈黙で表現して文殊菩薩から褒められる物語もあるが、それは主人公の深い深い智慧が前提になっているのだ。上田さんの言われる「批判的な討議」に耐ええる思想の持ち主だったからこそその話だったろう。神秘主義は価値ある思想だが、それもまた乗り越えねばならないのである。

さて、以上のような前提をつけたうえで話だが、やはり「沈黙」は宗教研討話や宗教教育の出発点として大切なのではないか、とも思う。新約聖書の「マタイによる福音書」(一四・二三)は、イエスが「群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になつても、ただひとりそこにいられた」ことを伝えている。

ユダヤの修行者イエスは衆生とともにではなく、あえてたった一人で山にもつたのだ。都会を避けて高野山や比叡山に登った祖師たちと何と似ていることだろう。

東西宗教交流学会での「批判的な討議」は、西田哲学の「矛盾的自己同一」やキリスト教の「聖霊」、あるいは「浄土」や「神の国」を問い直す、といった形で進められている。たとえば「一即多・多即一」の「即」とはどんなことなのか、数学の「イコール」と同じなのか違うのか、考えてみると、なかなか難しいものだ。こうした問いかけを日々忘れることなく、なおかつ一日に一度くらいはあえて沈黙の世界に戻りたくも思うのである。

(すがわら・のおお／ジャーナリスト)

